
偽者探偵 アギト

こうちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽者探偵 アギト

【Nコード】

N2363R

【作者名】

こうちゃん

【あらすじ】

ある犯罪者が探偵に化けて、指定人物を牢屋に打ち込む。(指定人物は犯罪を犯していない。)今こそ頭脳戦の幕開けだ。

戦の幕開け

日本に一番西にある、いやそこが日本なのかも分からないところで、ある町があった。その町の名前は「犯罪市」

その名の党利で犯罪だけが渦巻く町だった。その町が日本の最西にあるため、世界共通の法律が通用しなかった。

でも光があるから闇がある。その党利、その町にも探偵がいた。しかし、犯罪だけ渦巻く町で育つ者は皆 悪に目覚めた。探偵なんて者が存在するだけ奇跡だった。そう、存在した所で少数集団でしかない。もちろん、犯罪の数に付いて行けるはずもない。

そんな環境で結成したのが、「サークル k」。なぜk??と反応する人もいる。kはいろんな意味を持つ。サークルkの合言葉は「私たちは、正義という名の元に集まった探偵たち、サークルk！犯罪者どもをKeつとばせー（蹴っ飛ばせ）。」くだらない、実にくだらない。何処にもありそうな合言葉だ。しかし、その町はほかの国との、交流を禁じている。だから、そんなきれいごと何処にもあることを知らない。

最強探偵グループがあれば、最強犯罪グループもある。そう、その名も「アギト」。アギト内部は何課にも分かれている。武装課、頭脳課、暗殺課、・・・・・・ アギトのBOSSは内部の幹部ですら見たことがない。どっかの課にBOSSがしたっぽとして働いていると言う噂もある。アギトは自分たちを完全に隠している。サークルkですら、存在を知らない。

そんなある日の正午アギトのボスが頭脳課の課長アギトを呼んだ。ボスはアギトにこう伝えた。

「こんな偶然もあるもんだな。お前の名前が内の組織の名前と一致するとな。ま、世間話はそのくらいにして、そろそろ本題に入ろう。」

いや、それ世間の話を世間話というのだろう。まったく世間に関係していない。

「アギトよ。この町がどの国とも交流をしてないのは知っているな。」

へえ。初めて知った。

「その分をお前は知っているか？知らないのなら教えやろう。この町にドラゴンが存在するからだ。」

ドラゴンはこの場合、生き物の方を示しているのではなく。能力を示しているのである。能力、そう超能力。この町は、ドラゴンと言う超能力が人々に与えられる。その為にほかの国がその力を利用しようとしている。だから、この町は全ての国、団体、集団との交流を禁じている。

「そこで、お前のドラゴンを信じて命令だ。最近サークルKとかって言う探偵集団が活発になってきた。だから、そいつらを潰して来い。」

「B O S Sのおっしゃる党利に。」とアギトは返事し闇に消えていった。

入団

アギトが去った直後に、B O S Sも立ち上がった。そして、こう呟いた「盗み聞きでも、命がけだぞ。そいつにばれたら念じるだけで殺されるからな。ま、どうでもいいか。」

そして、B O S Sもどっかに消えていった。その後、その部屋の太い柱から人影が現れた。「恐ろしい人だ。」と言い消えて浮く。その部屋にはもう誰もいない。怖いくらいに静かだ。

時は少し飛び、ここはサークルK総本部基地前。そこにはアギトと門番二人がいた。門番はおそらくドラゴンであろう。それも、攻撃系の。

アギトはそこで例のくだらない合言葉をいい。「入団したい。」と言った。それを聞いた一人の門番は中に入り、幹部を呼びに行った。

それから、数分いまだに一人も出てこない。そこで、アギトは自分のドラゴンを使った。「ふっ、なるほど」と言い。待ち続ける。

それから、又数分。やっと一人の男の人が出てきた。年は見たところ22歳前後といったところか。そして、その人は「入団したい人は君かね?」と聞いてきた。アギトは軽い声で「はい。」と答えた。その男の人は、フーンといいながら、足から頭へじつと見てくる。アギトは顔色一つ変えずに待っていた。ずっと、ずっと、ずっと、さすがにそれだけ待つとアギトも切れる。「入団したいから早くしろ。」とちょっときつく言う。その男の人があわてて返事する。

「あつ、ごめんごめん。じゃ、質問するよ。見たところ、君もドラゴンだが何の能力なんだね。」

「……脳破壊、簡単に言くと、念じた相手を瞬殺するドラゴン。」

（この子はちょっと危険だ。ま、仲間まで殺しやしないか。）

「入団試験おめでとう、合格だ。」そういい、アギトに抱きつこうとする。がっ、アギトは一樣犯罪集団の幹部、簡単に隙は見せない。瞬間移動の様に男の右わき腹を簡単にすり抜ける。いつの間にか、男の人と背合わせに成っていた。男のほうは、まだ、抱きつくポーズの最中で固まっていた。

男の人は手を下ろし「私の名前はランク。ランク ポールスだ。」と呟いた。

その声は、さっきまでのチャンチャラした声ではない。ちょっと怖いくらいに。

アギトのドラゴン（特別編）（前書き）

今回の話しこのストーリーとは、まったく関係ありません。

アギトのドラゴン（特別編）

アギトのドラゴンは「脳破壊」何かではない。

アギトの本当のドラゴンは「脳図書」である。脳図書は略式で本命、「脳内図書館」。

その能力は、簡単に例えば、アギトの魂だけ、相手の脳内を書庫にして脳内に入る事ができる。

アギトは、そこで本を読み、相手の記憶を探ることが出来るのである。そして、その本のページを破ると、そのページに書かれている記憶はその人から抹消される。その逆で、また、自分で付け足すと、その党利の記憶がその人に入る。

一番怖いのは、アギトが脳内で暴れることだ。そうすれば、記憶はもちろん、脳本体にまで影響が出る。のうほんたいそして、相手は死ぬ。

そのドラゴン、多分「犯罪市」で一番恐ろしい能力である。

アギトのドラゴン（特別編）（後書き）

いつも、短くてすみません。

ドラゴンがSランク???!!

それから、数秒。二人はずっと背を向かい合っていた。そこには、埃が混ざった軽い風吹いていた。

突然、空気が読めないと言うしかない返事がランクから返ってきた。

「ここは寒いだろ。中に入って君のドラゴンのランクを計って見よう」(このランクは人の名前ではない。)

「はいっ」

アギトは又しても軽い返事をした。元気がないようだ。

二人は半信半疑である相手に警戒心を解かなかった。

「そ、そんなに警戒心を張らなくても。張っていることくらいバレバレだね。」

「其方こそ、眉毛から筋が見えているよ。」

そんな、会話を続けながら、意地を張り合っていた。

会話している内に着いたのが「ホール」と呼ばれ丸くてでっかい部屋でたくさんの扉だけがある部屋だった。扉の上には「マーメイド」「武器」「機密」とか、たくさんの看板があった。その中でアギトが目に入ったのが、マーメイドの部屋だった。なぜ、マーメイド???人魚???

だが、アギトはその場で声は出さなかった。一様敵の総本部だから。

アギトは機会がたくさんある部屋につれて来られて、いろんな機会を使って、ドラゴンを計った。その結果ランクはS、トップクラスのものだ。

計画実行の準備

ランクはこの驚く結果に汗を流していた。

思わず「これはすごい！」と言ってしまった。アギトにはいい迷惑だけど。アギトは顔には出さなかったけど心の中ではものすごくイライラしていた。けど我慢した。

夜になったらランクはアギトを彼の部屋まで案内した。「ここが今日から君の部屋だ。」

そこは石でできた部屋で約9平方メートルの小さい部屋だ。ドアは木でできていて小さい穴がある、外を見るためだろう。そして部屋のドアから右を見て小さい机がある、机の隣にベットだ。

机の上には羽ペンにランプ紙が5枚ほど。何に使うかは知らない。

そしてランクは「おやすみ、よい夢を」と言い部屋を去った。アギトは特にやることもなくベット行って浅い眠りについた。いつばれてもおかしくないので半分目を開けたまま寝た。

朝になりアギトは起きた、睡眠不足などがなくいつもどおりじゃない一日が始まる。

歯磨く、朝食などを終えたときトイレに行った、その時に「ブーブー」トイレの途中でサイレンがなった、柄にもなく少しあわてたアギトはトイレを飛び出した。

その後のアナウンスになる、ランクの声だ。「ランクA、報酬1000000（百万）、搜索ミッションだ。やりたい人は会議室に来い！」

アギトはこれを聞いた後すぐに会議室に行った。金がほしかったわけではない。二重ミッションがやれるチャンスだったのだ。

アギトはある計画を立てた、まずミッションに出たふりをしてちやちやと終わらせ、誰にもきずかれずに帰ってくる、それでこの基地の搜索に当たる。

この計画を実行させるための踏み台にちょうどいいと考えたアギトはミッション参加を試みる。

計画実行の準備（後書き）

疲れたから次回で

ダサイ男は負ける

そして会議室では10人ほど集まった。見るからに強そうな人ばかりだ。でもアギトには関係のない事だ。

アギトは適當の場所に座った。その時、身長180cmぐらいの顔に無数の傷と筋肉の鎧を纏った人がアギトの方歩いて来た。案の定アギトの前に止まり、偉そうに語り始めた「おいおい、新入り、ぼやっとしてないで挨拶にこねえか！おらあ。ついでに有り金全部出せ。ハッハッハ」

それにを気にしないで周りの人は無視。視線すらこっちに向けてくれない。でも、アギトは捜査官。そう簡単には負けない。その時、アギトの目はかすかに青く光る。

ドラゴン発動

脳内図書館（内）

アギトは目の前にある鉄の扉を開ける。本がたくさん置いてある部屋に来了。ほとんどが殺人、格闘など荒っぽい本（記憶）ばかり、アギトはそこから最新の記憶に関する本を見つけた。白紙のペーシまで行くと、何もないのに次々と出来事が書かれてる。

内容はこうだ；

「新入りがここにいる、またムカつく奴が来た。ちょっと、しばらくこうか。オレ様の恐ろしさを教えてやる。そしてオレはそいつの

前に立つ、いろいろ文句を言ったが、一言も返ってこない。俺に恐れを感じてる、ハハ、ようえじゃなえか……」

文はここで終わってる。そしてアギトはいつの間にか羽ペンを持っている。そしてこう付け足す。

「俺は幻覚でも見ているのか？怖い、怖い、怖いこいつが怖い。後ろになんかいる。化け物だああああああ、うわあああああああああああああ。」

ここでペンを下ろす。そして、ドラゴンを解除する。

現実（会議室）

いつの間にかその偉そうな男の人は地面に座って全身をガクガクさせていた。そしてアギトは手を男に伸ばす。彼を引き起こそうとした。だがその時、男の人は叫びだした。「うわあああああああああああああああああああ。」

その大きな声にさすがに振り向かずにはいられない。周りの人変な目でこっちを見る。それでも男は叫び続けた、「化け物だあああああ、助けてくれええええええええええ。」

そしてその男の人は、周りを片っ端からしがみ付いた、でも誰も顔色一つ変えずに気にしない。それで、みんな笑い出した、「見ろよ。こいつ、おもしろええ。馬鹿みたい。」「豚だな」「だっさ」

正義集団でも心のエグイ人はいるのだなあと思い。アギトには新しい印象がついた。

ダサイ男は負ける（後書き）

ホンとダサイですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2363r/>

偽者探偵 アギト

2011年11月13日22時43分発行